原著論文

生涯スポーツの推進に関する一考察 — 競争の形式およびクラブ間の顧客をめぐる競争に着目して —¹

河 野 清 司（至学館大学短期大学部）²

Abstract

Education for Sustainable Development (ESD) was launched in an effort to address recent global issues in the context of building sustainable ties between humans and nature and individuals and society. Lifetime sport play a vital role in creating and fostering sustainable connections among individuals with varying physical abilities. The present study therefore explores the types of competition that bring together individuals of varying physical abilities. Aiming to make inquiry into promotion of lifetime sport, the study also examines competition among sport clubs for members desirous of competition from members of other clubs.

In the study, competitions in masters swimming and wheelchair basketball were examined based on Georg Simmel's theory of conflict. Furthermore, from the viewpoint of gaining social capital, competitions held among sport clubs were examined with regard to members desire to compete with members of other clubs.

The findings were as follows. First, competition among individuals of different ages requires setting rules that reduce the range of age variation with regard to their physical abilities, thereby establishing a competition framework that demonstrates excellence in performance within the same range of ages. In contrast, competition among individuals with disabilities requires setting rules that differentiate the varying physical abilities of the differently abled as well as rules for teaming differentiated individuals, thereby establishing a competition framework that demonstrates excellence of a team in its ability to both score and defend. Second, competition among athletes of different sport clubs is vital in promoting lifetime sport. In particular, competition among sport clubs to satisfy individuals' desire to "engage in competition with people outside of the sport club in regional games" is essential since the services generated as the result of such inter-club competitions not only benefit the clubs but also contribute to achieving social value, which implies promotion of lifetime sport.

Keywords: lifetime sport, ties, forms of competition, social capital, sports club

¹ A study on the promotion of lifetime sport: Focus on different forms of competition and inter-club competitions for members

² Kiyoshi KONO, Shigakkan University Junior College, 55 Nakoyama, Yokonemachi, Obu, Aichi 474-8651, Japan

キーワード：生涯スポーツ，つながり，競争形式，ソーシャル・キャピタル，スポーツクラブ

1. はじめに

現代社会においては、地球温暖化などの環境問題だけでなく、開発や貧困の問題など、地球規模の問題が生じている。それらの課題の解決に向けた課題教育（環境教育や開発教育、人権教育、平和教育など）を総合化した取り組みの結果として誕生したのがESD（持続可能な開発のための教育）である¹⁾。日本においては、人と人、人と社会、人と自然とのつながりを大切にしながら、各地域における環境保全や健康福祉、地域活性化・まちづくりなどのESD活動の実践を通して、持続可能な社会を築く担い手を育成することがESD活動の目標として示されている²⁾。

このような教育活動だけでなく、それを支える文化においても、この「つながり」について考えることが必要であろう。これに関し、宗教とは異なる形式で人々を結びつけているのが、スポーツであろう。例えば、夏の甲子園大会は、全国各地の代表チームが野球を通してつながる大会である。これを可能にしているのが、まさにスポーツの競争である。生涯スポーツにおいては、このような競争を楽しむ人々のつながりを生涯にわたって構築することも必要であろう。そこで、本稿は、つながりを生み出すスポーツの競争に着目し、その形式だけでなく、競争に対する欲望を有するスポーツ実践者（顧客）の獲得をめぐるスポーツクラブどうしの競争についても分析を行うことにより、競争の形式およびスポーツクラブ間の競争という点から生涯スポーツの推進について考察することを目的とする。

このための方法として、第2章においては、一般的なスポーツライフ・コースに対し、新たなコースがスポーツで生まれていることを、競

争に対する欲望との関連で考察していく。第3章では、ゲオルク・ジンメルの闘争論の分析を行うことにより、競争について考察するための概念の検討を行っていく。第4章では、第3章で検討された概念を利用し、マスターズ水泳大会と車椅子バスケットボールの分析を行うことにより、多様な人々を結びつけるために必要な競争の形式について述べていく。第5章では、「ソーシャル・キャピタル」という概念を特定の方法で援用することによって、競争に対する欲望を2つに区分すると同時に、それらの欲望を有するスポーツ実践者（顧客）の獲得をめぐるスポーツクラブ間の競争が生涯スポーツの推進という社会的価値を実現するための一助になることについて考察していくことにする。

2. 生涯スポーツに関する検討

2.1. スポーツおよび生涯スポーツの定義

生涯スポーツについて考えるまえに、その言葉の規定詞であるスポーツについて、辞書的な定義を確認してみたい。「最新スポーツ科学事典」³⁾によれば、スポーツとはルールに基づいて身体的能力を競い合う遊びの組織化、制度化されたものの総称を意味しており、遊戯性、競争性、身体活動性、歴史性の4つの要素によって特徴づけられる文化形象である。ここでは、「スポーツ」をこの定義にもとづいて考えていく。

それでは、「生涯」という限定詞が「スポーツ」に付与された場合、生涯スポーツはどのように定義されるのであろうか。まず、対象者に関しては、つぎのように規定されている。「生涯スポーツは、一部の選手や特定の人たちに限られたものではなく、すべての人びとが対象となる。性別、年齢、職業、階層、地域、その他心身の

ハンディキャップや運動能力などにかかわりなく、誰でもが参加できるものである。門戸は、すべての人に開かれている」⁴⁾。つぎに、生涯スポーツの時期についてである。これに関しては、「生涯スポーツは、特定の時期に限られるというものではなく、生涯を通じて実施するものである。生涯にわたってということは、継続的という意味も含まれる」⁵⁾とされている。

上記の定義から理解されることは、生涯スポーツにおいては、スポーツをプレーする個々人の「参加形態」と「継続性」が焦点になるということである。参加形態に関しては、形式にとらわれないウォーキングや散歩などの身体活動と、ゴルフやテニス、バドミントンなどのような競争形式にもとづく身体活動がある。さらに、継続性に関しては、ウォーキングなどを個人や小集団で継続して行う場合と、地域のスポーツクラブに所属してゴルフや水泳、テニスなどを継続する場合がある。

2.2. ライフステージとスポーツライフ

ここでは、「ライフステージ」と「スポーツライフ」という視点から生涯スポーツに関するスポーツライフ・コースについて考えてみたい。まず、ライフステージとは、「人の生涯をある何かの基準で区分した諸段階」⁶⁾のことである。さらに、スポーツライフとは、この各ライフステージにおいて行われるスポーツとの関わり方を意味している。

金崎⁷⁾は、暦年齢を基準としたライフステージとそこでのスポーツライフについて述べると同時に、それらを生涯という時系列で捉えた場合のスポーツライフ・コースを二つのパターンにまとめている。まず、Aパターンは、幼児期に遊びとしての運動を行い、少年期から青年期にかけては発育発達や体力づくりの課題に取り組み、その一方で選手として競技スポーツを実施する。成人期以降は、社交や健康、楽しみを求めてスポーツを実施する。もう一つはBパ

ターンであり、幼児および成人期以降のスポーツライフはAパターンとまったく同様である。違いは、少年期と青年期のスポーツライフであり、競技志向のスポーツとはかかわりを持たず、レクリエーションとして楽しみ志向でスポーツを実施する。

このように、ライフステージの変化、あるいは加齢による身体能力の変化に応じて、スポーツとの付き合い方を変え、それによってスポーツを継続していることが理解されてくる。

2.3. 競争に対する文化的な欲望の高まり

生涯にわたってスポーツを楽しんでいる人々の姿を捉えるには、既述の二つに新たなスポーツライフ・コースを加える必要があるだろう。つまり、「何歳になっても競い合いたい」という文化的な欲望⁸⁾をもった人々のスポーツライフ・コースである。このことを示しているのがマスターズ大会である。(一社)日本マスターズ水泳協会⁹⁾によれば、2015年の7月に東京辰巳国際水泳場で開催された「Japan Masters 2015」では、全国から6,581人のスイマーが参加し、5個の世界記録、56個の日本新記録が誕生している。また、(公財)日本体育協会が主催する「日本スポーツマスターズ」の参加者は、2001年の第1回大会(宮崎)の5,354人から2014年大会(埼玉)の8,265人に増加している¹⁰⁾。このような傾向は、以下のようなボール・ワイスのスポーツ観に新たな対象者を加えることになるだろう。

私たちは、芸術的天才に、歳をとると共に熟していくこと、そして競技者の最高点に達する年齢をはるかに越えて成熟し続けることを期待するのに対し、競技者については、彼が彼の生活を主として現在生きているということ、しばしば完全に成人する前に競技の最高点に達してしまうことがあることを理解する。

競技者は彼自身を現在充足するために戦っている。現在は彼が彼自身を造りだしている時である。彼は、未来ではなくて、現在、彼に可能である卓越を求めており、卓越できるし、卓越するのである。彼は訓練も改善もできるが、全盛期のすばらしい成功は若い時のみ収められる¹¹⁾。

つまり、マスターズ大会における参加者の増加は、若者だけでなく、中年期や高齢期のライフステージに属する人々にも競争に対する文化的欲望が生じていること、さらには、中高年者や高齢者でもスポーツにおいて身体的な卓越性を示すことができることを示している。ここから、競争に対する文化的な欲望の高まりに目を向け、これを満たす競争形式を構築することが、生涯スポーツを推進するための一助となると考えられる。

3. ジンメルにおける闘争の理論

3.1. 闘争の形式的な特徴と社会的意義

本稿の目的の一つは、スポーツにおける競争の形式という点から生涯スポーツの推進について考えていくことであるが、そのためにも、まずは競争およびその社会的意義について知る必要があるだろう。これに関して有効な示唆を与えてくれるのが、ジンメルの闘争論である。ここでの「闘争」は、ドイツ語の Streit の訳語であり、人びとが対抗したり、競ったり、争ったりするといった対立的な人間関係の総体を意味すると同時に、「競い合うこと」それ自体にまつわる心情をも含んでおり、何となく反感や緊張関係をもつことから、労働運動や階級闘争にいたるまで、関係の対立一般を含んだ語として用いられている¹²⁾。さらに、ジンメルの言及する闘争には、法的係争だけでなく、スポーツにおける競技も含まれている。この闘争論から、闘争の形式的な特徴だけでなく、その社会的意

義についても学ぶことができる。

まず、ジンメル¹³⁾によれば、闘争はもっともまなましい相互作用のひとつであり、社会化を意味している。別の言葉で表現するならば、闘争は最も生き生きとした相互作用の一つであり、それ自体が人と人を関係づける社会関係形成 (= 社会化) の一形式である¹⁴⁾。一般的には、人と人の関係を破壊する行為として闘争は理解されがちであるが、それが関係形成の形式である理由はどこにあるのだろうか。

ジンメルによれば、闘争の研究を行う場合には、「社会の直接的な統一形式」に及ぼす貢献を考慮しなければならないという。この統一に関して、ジンメルはつぎのように述べている。

個々別々なものとしては妨害的で破壊的なものでさえ、生のもっとも包括的な関連においてはあくまでも積極的であり、そのみにあてがわれた役割を欠くどころか、むしろそれを果たしている。客観的な系列と価値の系列においては、すべてのものがプラスとマイナスとしてあらわれ、たがいに反対しあい、たがいに廃棄しあうものとして、たがいに対立してあらわれるが、これらすべてのものも高所よりすれば、それでもなお生の統一へとたがいに入り混じって感じられる¹⁵⁾。

この「統一」には二重の意味がある。まず、社会的な諸要素の分裂、分離、不調和に対し、それらに対置される「統一」である。別言するならば、分裂や分離がないという意味での統一である。この狭義の統一に対し、ジンメルが「統一」とするのは、狭義の統一的関係と二元的関係の両方を含んだ広義の統一を意味する¹⁶⁾。つまり、統一とは、対立する二つの力を内に含みながらも全体として調和のとれた状態を意味しているのである。

ジンメルは、この統一状態を個人の「人格」と諸個人の統一体としての「社会」の面から考

察している。まずは、人格の統一である。ジンメルによれば、人格の統一は人格の内容が様々な規範（論理的規範、客観的規範、宗教的規範、倫理的規範）と寸分たがわず調和することによって獲得されるだけではない。なぜならば、「反対と抗争とがたんにそのような統一に先行するだけでなく、また生のあらゆる瞬間に人格の統一のなかで作用している」¹⁷⁾からである。つまり、人格の統一とは、最初からなされているのでもないし、諸規範と完全に調和することで獲得されるわけではないということである。むしろ、さまざまな反対や対立が先行し、それらが人格の統一のなかで作用しているのである。このような統一は、社会においても存在する。ジンメルによれば、ある集団がたんに求心的・調和的であり、たんなる「結合」にすぎないとすれば、それは経験的に非現実的であるという。これに対し、社会が一定の形態に達するのは、調和と不調和、結合と競争、好意と悪意といった対立するカテゴリーの相互作用の結果にもとづいている¹⁸⁾。

上記のような統一の機能について、「反対」という闘争の形式で考えてみたい。一般的には、組織における反対者は、組織を破壊する要素とみなされるであろう。しかし、ジンメルによれば、「反対」は人々を結びつける形式なのである。ある組織において、誤った意思決定や政策を行う人々に対して無関心であるならば、彼らと結びつくことはないだろう。これに対し、「反対」の意を表明することによって、彼らとの間にある関係が築かれることになる。なぜならば、「反対はしばしば、われわれを本来ならば我慢のならない人びととの共存をなお可能とする唯一の手段」¹⁹⁾だからである。ジンメルによれば、反対は、「総体関係を維持するためのたんなる手段にとどまらず、また総体関係を現実に成立させる具体的な機能のひとつでもある」²⁰⁾。ただし、反対することによって双方が対立の関係で結ばれるだけでなく、組織自体の発展といっ

た共通の目標を達成するために両者が競合することがより重要である。菅野が述べているように、「闘争はかならず、統一を志向するエネルギーとの相関において社会関係の形成力をもつのであり、両者が一つになってはじめて、組織や集団は、具体的な生き生きとした統一性を保つのである」²¹⁾。

以上のように、対立を通して二つの力を結び付けることが闘争形式の特徴であり、さらに、その対立的な関係を通して社会や組織の発展に貢献することが、まさに闘争の社会的意義であると考えられる。

3.2. 闘争の自律化と結合の原理

すでに述べたように、闘争は最も生き生きとした相互作用の一つであり、それ自体が人と人に関係づける社会関係形成の一形式である。闘争がそのような形成力として機能する理由は、闘争自体の自律化と同時に、結合の原理にあると考えられる。このことについて、闘争のひとつである法的係争で示していく。

まず、法的係争としての裁判においては、当事者間の争点について、公的機関が法にもとづいて最終的な判断を下すことになる。ここで重要なことは、個人的な条件や私情は排除され、客観的な法にもとづいた判決によって、係争に決着がつけられるということである。係争が成立するには、それに先立って、個人の主観や感情を超えた社会的な制度として裁判が確立されていなければならない。菅野は、社会が制度として自律化した性格を帯びることを、「物象化された（あるいは事実化された）社会関係」²²⁾と名づけている。このように、社会的な制度を媒介にした事実化された争い（ザッハリッヒな争い）が個々人を超えて自律的に存在していることが、社会関係形成のための闘争の前提条件である。

以上のように、法的係争が成立するためには、客観的な法にもとづく裁判制度が必要である

が、それだけでは不十分である。なぜならば、その制度を当事者どうしが承認しないかぎり、係争が生じることはないからである。このことについて、ジンメルはつぎのように述べている。

法規のもとへの共通の従属、判決はたんに証拠の客観的な重要性にしたがってのみ行われるべきであるとする双方の承認、破棄できないものとして両当事者に妥当する形式の遵守、手続き全般が社会的な勢力と秩序によってとり囲まれ、それらによってはじめて意味と確実性があたえられるという意識—これらのすべてが法的な係争を、敵対者のあいだの統一と一致の広範な基礎の上にもとづかせている²³⁾。

このように、法的係争が成立するためには、法にもとづくザッハリッヒな争議である裁判の手続きと結果を承認し、それに従うという姿勢が、当事者の双方になければならないのである。このような客観的な法、あるいはルールを承認することに対し、菅野はつぎのように述べている。

ここで問題になっているのは、客観的にルールが存在しているという事実そのものではない。そうしたルールの存在、さらにはその妥当性（なるほど守るべき価値があるな、という〈納得〉があること）が意識されていることが大事なのである。ここではこうした意識を〈ルール感覚〉と呼ぼう。ジンメルの「闘争論」に関する私の解釈の核は、ジンメルは〈ルール感覚〉を体感している成員どうしの競争にこそ社会関係形成に関するポジティブな意義を見い出しているという点にある²⁴⁾。

以上のように、自律化した客観的な制度にもとづいて争うだけでなく、その結果を承認するという態度（ルール感覚の共有化）を当事者の

双方が同時に有するという点において、闘争には結合の原理が内在化しているのである。

3.3. 第三者をめぐる競争

ジンメルの社会学では、A対Bという当事者どうしの直接的な闘争だけでなく、第三者をめぐる社会的集団間の競争（第三者である大衆の支持を得ることをめぐって行われる競争）についても言及がなされている。これは、顧客の獲得をめぐる企業間の競争に相当する。この競争の特徴と社会的な意義はどこにあるのだろうか。

まず、第三者をめぐる競争について、ジンメルはつぎのように述べている。

競争は、競争している両派のそれぞれを駆りたてて、その第三者に異常なまでに接近させる。競争については有害な攪乱的で破壊的な作用が強調され、それ以外ではたんにかの内容上の価値のみが競争の産物として容認されるのがつねである。しかしこれとならんで、ともかくもこの巨大な社会化する作用が存在する。競争者は彼とならんだ競争相手をもち、しばしばこれによってはじめて本来の競争者となるのであり、彼はこの競争によって、競争の対象となるものを迎え入れて接近し、またそれと結びついて、その弱点や長所を探知してそれらに適応し、また自己の存在と所業を競争の対象と結びつけることのできるあらゆる橋わたしを探し求め、それに架橋することを強いられる²⁵⁾。

このように、第三者をめぐる競争においては、第三者に接近し、適合することが重要な課題になってくる。そのために求められるのが、大衆の嗜好や関心への配慮である。これに関してジンメルはつぎのように述べている。

他者の内奥の願望が他者自身にもまだ意識

されないうちにうまくそれを探知することは、競争にとって無数にあり、競争以外ではたんに愛情のみのないうところである。競争相手にたいする敵対的な緊張は、商人にあっては公衆の嗜好にたいする鋭敏な感覚をとぎすまし、公衆の趣味、流行、関心の当面の変化にたいするほとんど千里眼的な本能にまでなる²⁶⁾。

上記のように、この競争で勝利するためには、第三者である公衆の嗜好や関心について知る必要がある。経営的な視点でいうならば、消費者のニーズを知るということになるだろう。

さて、この競争が生み出す結果に着目するならば、それは社会的な価値ということになるであろう。ジンメルはこの価値と競争主体の主観との関係を明らかにしている。ジンメルによれば、「競争は集団の観点よりすれば、主観的な動機を客観的で社会的な価値を創りだすための手段として提供」²⁷⁾している。社会が発展するには、客観的で社会的な価値の創造が必要になるが、その手段として主観的な動機（例えば、相手を凌駕するということ）を利用するのが、この競争である。さらに、「当事者の観点よりすれば、客観的に価値多きものの生産を、主観的な満足を得るための手段として利用する」²⁸⁾のがこの競争である。勝者の条件は、競争相手よりも多くの社会的価値を生み出すことであり、そのことで競争の主体は満足感を得ることになる。つまり、主観的な動機を利用して客観的な価値を創造すると同時に、その客観的な価値で主体の動機を満たすこと、このような客観的な価値と主観との相互依存性がこの競争の特徴である。

それでは、このような競争は社会に対してどのような役割を担っているのであろうか。これに関しては、ジンメルに依拠する菅野の言葉が参考になる。

競争に勝つためにはまず＜相手をよく知る＞ことが必要になり、さらに第三者の支持を目的とする競争の場合は（たとえば、資本家どうしの競争）、相手ばかりではなく、支持を期待する人たち（消費者としての大衆）の欲求や関心への細かい配慮が必要になる。その結果、人びとの生活がたんなる並存ではなく、一つのネットワークを形成するまとまりをもった「圏」として成立するための関係の形成力として、「競争」は大きな機能を発揮する²⁹⁾。

このように、第三者の欲求や関心への配慮を通して、社会的な価値を創出することが、第三者をめぐる競争の社会的な意義であると考えられる。

4. 生涯スポーツにおける競争の形式

4.1. 競技の形式性と競技主体の意味づけ

既述のように、人と人を結びつける社会関係形式のひとつが闘争であるが、ジンメルは競技をこの闘争の一つとして捉えているだけでなく、むしろ闘争の理想的な範例としていえる。この競技の競争形式を分析することは、生涯スポーツを推進していく際の形式だけでなく、闘争の理想的形態について理解することにつながる。なぜならば、ジンメルにおいては、競技や裁判における係争が「社会関係の形成力として評価する闘争のあり方」³⁰⁾として語られているからである。

さて、そもそも闘争が成立するにはいかなる条件が必要であろうか。そこには二つの条件がある。まずは、「敵対的な衝動」の存在である。それは他者を否定することによって自身の人格を肯定する際に現れる。なぜならば、「人格は、自らがまったく攻撃されず、他者の純粋に客観的な表現にたいするばあいさえ、反対による以外には自らを主張できず、また人格が自らを肯定する最初の本能は他者の否定であるともい

われるからである」³¹⁾。ただし、ジンメルによれば、「人は敵対的な衝動に心の独立性を認めるかもしれないが、その心の独立性にもかかわらず、敵対的な衝動はやはり敵意の総体現象を基礎づけるに十分ではない」³²⁾という。そのような衝動を現実化させるには、第二の条件としての「客観的な利害」が必要となる。まさに、「闘争とはもともと人間の自然的本性にかなった状態であると同時に、それが何らかの利益をもたらす場合に現実の場面で尖鋭化すると考えられる」³³⁾のである。つまり、一般的に闘争が成立するには、敵対的な衝動と客観的な利害という二つの条件が必要となるのである。

これに対し、闘争して勝利することの魅力自体が排他的な動機をなしている唯一の状況が存在する。ジンメルによれば、それがまさに「競技」である。この競争の特徴は、価値のない競技得点であるにもかかわらず、金貨にたいするのと同じ情熱で争われることである。ここからジンメルは、競技における「衝動の形式主義」³⁴⁾を明らかにしている。スポーツにおける競争について考える場合には、このような形式とそれに対する競技主体の衝動という視点が重要である。前者の形式に関しては、スポーツにおける競争を「事実性（ザッハリッヒカイト）にもとづく闘争」³⁵⁾として理解する視点が必要であろう。菅野³⁶⁾によれば、ザッハリッヒな闘争は、(1)当事者に同等に妥当するルールにしたがってなされること、(2)当のルールの妥当性が当事者に深く了解されていること、(3)何を競い合っているのかの焦点が明確に限定されていること、(4)したがって争点以外のほかの人格的な側面については「保留」がなされていること、といった特徴を備えている。このように、当事者どうしが争点を共有することで結合し、それをめぐって競い合うという、結合と闘争の論理がスポーツの競争においても求められることになる。ただし、スポーツの場合には、スポーツのルールによって争点が明確に限定されている

だけでなく、それによって生み出されるシンボルによって競争が展開されているところに、スポーツにおけるザッハリッヒな競争の特徴があると考えられる。野球を例にするならば、野球は得点の多さで勝者を決めるゲームであり、その前提として「セーフ」と「アウト」をめぐる攻防が展開される。この「セーフ」／「アウト」は野球のルールによって構成された独自のシンボルであり、これをめぐって実に多種多様なプレーが展開されるところに野球の面白さが生まれてくるのである。

このように、スポーツにおける競争が成立するためには、客観的なスポーツのルールと独自のシンボルが必要であるが、それだけでは生き生きとした競い合いになることはないだろう。なぜならば、競争が成立するためには、スポーツのルールとそのシンボルに意味を認める主体が必要だからである。それらに主体が意味を認めるということは、それらが欲望の対象になると同時に、その獲得が生喜びにつながることを意味する。菅野³⁷⁾によれば、人と競い合って勝利を味わうことの魅力、つまり「闘争への欲望」は人間の生の喜びの基本の一つであり、それが最も純粋な形式として表現されたのが、純粋なゲームとしての競技である。さらに、「ゲームをとおしての〈生の喜び〉」（竹田青嗣の言葉を借りれば『ゲームのエロス』）は、人間が生きて楽しむ最大の契機の一つ³⁸⁾なのである。野球でいえば、「セーフ」／「アウト」というシンボルをめぐる競い合い、得点を重ねて勝利するという欲望を満たすことに大きな喜びを感じる人々がいないければ、競争は生じないのである。

以上のように、スポーツのルールとそのシンボルによって争点が明確に限定されているザッハリッヒな競争がゲームの次元で成立しているだけでなく、それらのゲームを通して競い合うことに競技主体が意味を認めていることが、人々を結びつける競争の成立条件であることが

理解される。

4.2. 多様な年齢層による競争の形態

スポーツは若者だけのものではなく、中高年者や高齢者にもその扉は開かれている。それでは、そのような年代の人々がスポーツを行う場合、どのような形式によって競争関係が生まれるのであろうか。ここでは、世界水泳とマスターズ水泳を例にして、このことについて考えてみたい。

まず、世界水泳では高度なレベルの競い合いが行われるが、そこでの競技者のパフォーマンスをわれわれが観戦した時の感想には、「すごい」あるいは「自分にはあんなことはできない」というものがあるだろう。この評価は、一方ではある競技者への羨望であり、他方はある種の諦めである。ここには、われわれと一流競技者との間に大きな隔たり、いわば距離があることがわかる。相手に対する距離の感覚が大きい場合、彼らと競い合って勝ちたいという欲望は生じない。つまり、競争が成立するには、対戦者どうしの間に競争したいという欲望が生じるような適度な距離感がなければならないのである。

これに対し、相手との距離感を縮めることで対戦を可能にしているのが、マスターズ大会であると考えられる。他者との間に大きな年齢差がある場合、そこには体力や身体機能の差があることになる。この差をできるかぎり縮小し、個人間における競技能力を均等化するのが「区分」である。マスターズの個人競技の年齢区分は、日本では18歳～24歳、25歳～29歳、以降5歳ごとに区分けされている。マスターズ水泳の文脈において生み出されるこの年齢別クラスは、同一の年齢層にいわば橋をかけ、その距離を縮めることにより、「このクラスの中で一番になりたい」という強い欲望を生み出しているのである。さらに、「チャレンジを続けることによって次の年齢クラスではライバルに勝ち

たい」という意識や自己の身体に応じた動きの戦術といった固有の面白さを構成することになる。このように、マスターズ水泳においては、その文脈によって固有の年齢区分を生み出し、同一年齢層にある人々を接近させることによって、区分内での泳力をめぐる競争を生み出しているのである。

以上のように、マスターズ水泳においては、「年齢区分」という客観的なルールを媒介にすることによって、同一年齢層における泳力の速さの証明という事実性をめぐる競い合いが行われている。このことから、中高年者や高齢者においても身体的卓越性を示すことができるような競争形式（ここでは「区分」にもとづく競争）を生み出すことが、生涯スポーツを推進するための一助になると考えられる。

4.3. 障害者による競争の形態

スポーツは健常者だけのものではない。障害者にもその扉は開かれている。ただし、障害者どうしがスポーツで競い合う際には彼らの身体を考慮した新たな橋が必要となる。なぜならば、健常者どうしの競争以上に、個々の身体能力の差と多様性を競争に向けて結びつけていく形式が求められるからである。それでは、障害者がスポーツを行う場合、どのような形式によって競争関係が生まれるのであろうか。

これについて考えていくうえで重要な示唆を与えてくれるのは、車椅子バスケットボールのクラス分けを構成的ルールという視点から分析している渡³⁹⁾の理論である。構成的ルールとは「(Cという文脈において) XをYとみなす」⁴⁰⁾という形式をもつルールであり、「車椅子バスケットボールという文脈において個人のインペアメントを各持ち点とみなす」⁴¹⁾ということがこの形式に相当する。このバスケットボールでは、プレーヤー固有の障害(インペアメント)が、1.0から4.5までの「持ち点」という指標に変換される。これは車椅子と一体となった選手の

身体的能力を持ち点という形で固定化／実体化していく作業であり、クラス分けが定める範囲内で、各個人の「できる」ことの範囲と「できない」ことの範囲を、持ち点を付与することによって明示化している⁴²⁾。渡はこのインペアメントから持ち点への変換を「非障害化」⁴³⁾と表現している。つまり、「車椅子バスケットボールにおけるクラス分けは、障害者のみを対象として、1.0から0.5刻みに4.5までの持ち点を与え、身体を持ち点に変換し、『非障害化』を達成している装置として考えられる」⁴⁴⁾のである。これによって、どのような障害（インペアメント）があるかは背景に退き、「今現在の自分が持ち点に換算して何点であるか」⁴⁵⁾がプレイヤーにとっては問題になってくるという。このことは、「争点以外のほかの人格的側面については保留がなされること」という競争の「事実性」に相当していると考えられる。

この「クラス分け持ち点」によって生み出されるのが、できる能力に関する「差異」である。日常の社会においては、健常者と障害者の間で「できる」／「できない」という差異が存在している。それに対し、持ち点による差異は、ルールによって分節化されたスポーツ固有の差異である。これに関し、渡⁴⁶⁾は、障害（インペアメント）が変換された持ち点は、日常の社会において健常者からの差として表されてしまう「できないこと」ではなく、車椅子バスケットボールのなかで、車椅子と一体となった選手の「できること」であり、たしかに差異は産出されるが、それ自体はネガティブなものと言うことはできず、むしろ車椅子バスケットボール自体を成立させる条件を準備するものであると述べている。このように、用具と一体になった身体能力を差異化し、数値化するルールが競争の前提となっているのである。

このような機能的クラス分けによる持ち点のルールに加え、車椅子バスケットボールにおいては、「ゲーム中いかなるときも、1チームの

プレイヤーの持ち点の合計が14点を越えてはならない」⁴⁷⁾とする持ち点の合計を規定するルールがある。つまり、5人の持ち点の合計が14.0以内になるようにチームを構成しなければならないのである。このように、車椅子バスケットボールのクラス分けは、「機能的クラス分けと総合的クラス分けの複合」⁴⁸⁾であり、「差異の補正は、チーム間の平等化の実現という形で行われている」⁴⁹⁾のである。これにより、車椅子バスケットボールにおいては、勝利を追及するプレーにおいて、クラス1.0の選手とクラス4.5の選手の競い合い、つまり身体能力に差がある選手どうしの競い合いが可能となるのである。

さらに、「持ち点で端的に示される身体的な差異はすべての選手に了解されており、身体的な差異をもとに戦術が組み立てられている」⁵⁰⁾ことを考慮する必要がある。戦術の大部分が持ち点のミスマッチ（ゲーム中におこる体格や持ち点でのアンバランスなマッチアップ）をつくるように攻撃したり、ディフェンスしたりするように組み立てられているという。つまり、攻撃時の戦術として、持ち点の低い選手が相手チームの持ち点の高い選手を引き付け、味方チームの持ち点の高い選手をフリーにするようにチーム全体で動いているのである⁵¹⁾。

渡の理論をもとにして、車椅子バスケットボールにおける競争について考察するならば、このスポーツにおける「争いの焦点」が明らかになってくる。つまり、車椅子バスケットボールにおいては、競技者相互の関心の焦点は「持ち点の差異を利用したチームプレーによる得点能力と防御能力の高さの証明」という事実性に向かっているということである。この競争を組織するためには、用具と一体化した身体操作能力を数値によって分節し、それにもとづいて競技者を差異化すると同時に、差異化された個人の能力をチーム力として結集させるルールが必要である。さらに、差異化された個々の能力を

チームの勝利のために徹底的に利用するザッハリッヒな競い合いに意味を認める主体がこの競争の成立条件であることが理解される。

5. ソーシャル・キャピタルを育成するスポーツクラブ

5.1. ソーシャル・キャピタル

前章においては、対戦者どうしを結合させる形式という点からスポーツの競争形式について論じてきた。このような形式によって、多様な身体を有する人々の結びつきが可能になると考えられる。ただし、生涯スポーツを推進するためには、このような結びつきを恒常的に保持するだけでなく、それをベースにしながらさらに多くの人々を結びつけていくスポーツクラブの役割が重要になるだろう。そこで、本章においては、競争を通して生じるつながりの形成と拡大という点からスポーツクラブの役割について論じていくことにする。そこで着目するのが、「ソーシャル・キャピタル」という概念である。その理由は、競争による他者とのつながりを中心にしつつ、競争に対する欲望の増大が生み出す新たなつながりにも焦点をあてることができるためである。さらに、そのつながりの育成という点から生涯スポーツを推進するためのスポーツクラブの役割の一部について論じることができると考えられるためである。

さて、social capital（ソーシャル・キャピタル）の直訳は「社会資本」であるが、これでは道路や橋などの社会インフラと誤解されるため、最近では「社会関係資本」という言葉が定訳になりつつある⁵²⁾。このソーシャル・キャピタルとは、人々が他人に対して抱く「信頼」、それに「情けは人の為ならず」「お互い様」「持ちつ持たれつ」といった言葉に象徴される「互酬性の規範」、人や組織の間の「ネットワーク(絆)」である⁵³⁾。ソーシャル・キャピタルは地域社会の安定、さ

らには国民の福祉・健康などの分野に影響を及ぼすことが指摘されている⁵⁴⁾。前者に関しては、ソーシャル・キャピタルが豊かな社会は孤立した人をつくらない包容な社会になるという期待からソーシャル・キャピタルが重要視されるようになった。後者に関しては、社会関係資本が主観的健康と相関していることを実証している研究があり、社会関係資本が健康と関連している点についてはほぼコンセンサスが形成されつつあるとされている⁵⁵⁾。

さて、このソーシャル・キャピタル（社会関係資本）についてパトナムはつぎのように述べている。

社会関係資本が指し示しているのは個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である。この点において、社会関係資本は「市民的美徳」と呼ばれてきたものと密接に関係している。一中略一市民的美徳が最も強力な力を発揮するのは、互酬的な社会関係の密なネットワークに埋め込まれているときであるという事実、「社会関係資本」が注意を向けているということである⁵⁶⁾。

パトナム⁵⁷⁾は、このネットワークによって市民的美徳が発揮された例として、会計士のアンディ・ボシュマンが、ボウリングのローカルリーグでジョン・ランバートと知り合い、ランバートが肝臓移植待機者であることがわかった時に、自分の腎臓の片方の提供を申し出た話を紹介している。この話は、ボウリングを通して、二人の間に絆が生まれ、それがソーシャル・キャピタルを形成した事例である。本稿の問題意識に引きよせて言うならば、スポーツを通して競う合うことによって生み出されるつながりは、ソーシャル・キャピタルを形成する可能性を秘めているということである。

このように、スポーツによってソーシャル・

キャピタルが形成される可能性が示唆されていることから、地域づくりに関連するソーシャル・キャピタル形成の媒体としてスポーツクラブの役割を位置づけようとする動きがある。ここから、スポーツに関わることで、集団への帰属意識や友だちづくり、コミュニティ感情を醸成し、そうしたスポーツでの共有体験が地域の統合やコミュニティ強化をより促進しながら、しばしばソーシャル・キャピタルが形成されるとの見解が生じることになる。しかし、そのような見解はスポーツ世界の実体を失った見方であり、実際には解明されるべき課題を抱えている⁵⁸⁾。小林⁵⁹⁾によれば、スポーツへの参加がどのような社会的繋がりを可能にするのか、そしてそれがソーシャル・キャピタルの創出にいかに関与できるのかという問題だけでなく、スポーツで構築されたネットワークが他の暮らしの領域にまで応用可能なのかといった問題も、これらの研究の成果に負うことになる。

以上のように、ソーシャル・キャピタルという概念は、現代における地域社会の問題の解決に有効な示唆を与えてくれる可能性を秘めているが、スポーツ参加とソーシャル・キャピタル形成の関連性を証明するには、多くの研究と時間を要する。そこで本稿では、この概念を厳密に適用するのではなく、いわばゆるやかなかたちで適用していくことにする。ここで重要になるのが、スポーツの競争への欲望をベースにしたつながりの形態である。スポーツ参加と地域のコミュニティの強化を性急に結び付けるのではなく、まずは競争によって生み出されるつながりをいわばメタレベルのソーシャル・キャピタルとして把握することが、生涯スポーツのためには必要であると考えられる。

5.2. 競争を通して形成されるつながり

前述のように、ここではソーシャル・キャピタルの概念を緩やかなかたちで援用するが、そこで着目すべきは、ソーシャル・キャピタルに

関する二つの型である。なぜならば、これらはスポーツの競争に対する欲望形態に対応したつながりにも適用可能であると考えられるからである。

さて、ソーシャル・キャピタルの二つのネットワークについて、稲葉はつぎのように述べている。

社会関係資本の基本概念のひとつに、異質な者同士を結びつけるブリッジング（橋渡し型）な社会関係資本と、同質な者同士が結びつくボンディング（結束型）な社会関係資本という区別がある。被災者救済のためにさまざまな経歴の人々が集まるNPOなどのネットワークはブリッジング（橋渡し型）な社会関係資本であり、大学の同窓会、商店会や消防団等の地縁的な組織などはボンディング（結束型）な社会関係資本である⁶⁰⁾。

以上のように、ソーシャル・キャピタルには「結束型」と「橋渡し型」の二つの型があるが、スポーツにおける競争はその欲望形態に依拠してこの二つの型に相当するようなつながりを生み出す可能性があると考えられる。

筆者は現在、民間の商業スポーツクラブのテニス教室でスポーツをしている。スポーツクラブでスポーツ活動を行う理由は人それぞれ多様であろうが、「テニスを楽しみたい」という点では一致しているだろう。スポーツを楽しむということは、その競争を楽しむことであるとするならば、テニスの楽しみの中心には、そのルールにしたがって競い合い、相手に勝つことがあると考えられる。このような「クラブのメンバーとスポーツを通して競い合いたい」という欲望を媒介にした人々のつながりは、結束型のソーシャル・キャピタルに相当していると考えられる。民間スポーツクラブにおいて展開されているスポーツ教室は、このソーシャル・キャピタルを育成していると考えられる。

さらに、スポーツクラブにおいては、メンバーどうしのつながりを形成しつつ、継続して練習する過程において、「クラブの仲間とチームをつくり、他のクラブのメンバーと競い合いたい」という欲望が生じてくる。このような欲望を媒介にした競い合いで生まれる他のチームとのつながりは、橋渡し型のソーシャル・キャピタルに相当すると考えられる。このつながりを形成するためには、スポーツ教室型の練習では不十分であり、新たなサービスが必要になってくる。すでに、日本クラブユースサッカー選手権大会に代表されるように、民間スポーツクラブがアスリート養成の実践空間に参入していることからすれば⁶¹⁾、対外試合に向けたサービスは提供されていることになるが、そのサービスはあくまでもトップアスリートを目指す青少年が中心であり、中高年者や一般の人々を対象にしていなことが多い。さらに、同系列の民間スポーツクラブが組織する大会にクラブのメンバーが参加することは可能であるが、上級クラスの会員や技術の高い会員を対象にしているのが現状である。つまり、民間スポーツクラブで練習する多くの会員にとっては、競争に対する新たな欲望を媒介にして生まれるつながりは育成されていないのである。このつながりを育成するためにも、中高年者や一般的な人々でも参加できる対外試合を組織したり、その大会に出場するためのサポートをするようなプログラムサービスの提供、およびその試合に向けた「クラブ・イン・クラブ」⁶²⁾の思考がスポーツクラブには求められることになる。

以上のように、民間の商業スポーツクラブにおいては、クラブ内のメンバーと競い合いたいという欲望を媒介にしてメンバーどうしのつながりを形成しているが、そのつながりの過程において、他のクラブのメンバーと競い合いたいという新たな欲望が生み出されているのであり、この欲望は、対外試合等を通じた他のクラブメンバーとのつながりを形成する可能性を

もっていると考えられるのである。

5.3. スポーツ実践者（顧客）の獲得をめぐるクラブ間の競争

これまでスポーツの競争形式自体に人々をつなぐ働きがあることを示してきた。これに対し、ここではスポーツ実践者（顧客）の獲得をめぐるスポーツクラブ間の競争に着目していくことにする。その対象となるのは、地域のスポーツ活動を支えている総合型地域スポーツクラブと民間の商業スポーツクラブである。前者は1995年からスタートした文部科学省の「総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業」をもとにして誕生した。これは、地域住民が主体的に運営するクラブであり、「多世代」「多種目」型の活動を目指しているところにその特徴がある⁶³⁾。後者は、「民間の営利を目的とする経営組織が企業として利潤を追求し、多様な目的をもった人々を対象に会員制クラブを経営する健康・体力増進施設」⁶⁴⁾である。

この二つのクラブを特に取り上げる理由は、規模や施設・店舗数⁶⁵⁾のうえで、これからの地域における生涯スポーツの活動を支える組織として重要な役割を担うと考えられるからである。さらに、文部科学省においても、総合型地域スポーツクラブと民間の商業スポーツクラブがそれぞれ特色を発揮し、連携・協力して、地域における生涯スポーツの推進に寄与することが期待されているからである⁶⁶⁾。ただし、二つのスポーツクラブが連携・協力する以前に、生涯スポーツ社会の実現に向け、互いに競い合うことが必要であろう。なぜならば、タイプの異なるクラブどうしの競争がクラブ自体の利益につながるだけでなく、生涯スポーツの推進という社会的価値を実現するための一助になると考えられるからである。なお、どちらのクラブにおいても、クラブ経営を成功させるためには、「需要戦略（マーケティング）戦略」⁶⁷⁾を中核とするスポーツマーケティングの理論にもとづ

いたクラブ経営が必要である。これに対し本稿は、競争に対するスポーツ実践者（顧客）の欲望に着目し、そこからクラブ間の競争について論じているため、スポーツ経営学の視点とは性格を異にしているし、言及する部分もスポーツクラブの役割の一部分に限定される。しかし、スポーツ実践者の競争に対する欲望からスポーツクラブ間の競争について考えていくという方法は、スポーツクラブの経営にも一定の示唆を与えられる。なぜならば、「今日のマーケティングはセリング、つまり売り込むという古い感覚ではなく、顧客のニーズを満たすという新しい感覚で理解しなくてはならない」⁶⁸⁾からである。本稿の文脈で言うならば、スポーツクラブに対するニーズは多様であるが、競争に対する欲望もそのニーズの一つを形成していると考えられるのである。

さて、総合型地域スポーツクラブの増加により、商業スポーツクラブとの競争がより生じてくると考えられる。競争に勝利するためには、より多くの会員を獲得することが求められる⁶⁹⁾。そのためには、自他のクラブの強みと弱みを知るだけでなく、スポーツ実践者（顧客）により接近するが求められることになる。

それでは、スポーツ実践者に接近するには何が必要であろうか。すでに指摘したように、第三者をめぐる社会的集団間の競争では、公衆の趣味、流行、関心の当面の変化に注意を向けることが求められる。これをスポーツに援用するならば、スポーツクラブ間の競争は、第三者であるスポーツ実践者（顧客）の獲得をめぐる競争であり、そこでは彼らの嗜好や趣味を知ることが求められる。経営的な視点でいうならば、スポーツ実践者（顧客）のニーズを知ることになるだろう。

これに関し、「クラブのメンバーと競技会や大会に出場し、他のクラブの人々と競い合いたい」という欲望もそのニーズの一つであろう。これは民間の商業スポーツクラブで特に行われ

ている教室型の練習だけでは満たすことができない。この欲望を満たすためにも、総合型地域スポーツクラブにおいては、クラブ内の自主的なクラブづくりをサポートすると同時に、各種大会における競争を通した他のチームとのつながりをサポートするサービスを提供する必要があるだろう。このようなつながりは、橋渡し型のソーシャル・キャピタルに相当する資本を育成すると考えられる。

以上のことより、スポーツクラブ間（総合型地域スポーツクラブと民間の商業スポーツクラブ）の競争の社会的意義が明らかになる。つまり、この競争は、スポーツ実践者（顧客）の競争に対する欲望に接近するための社会的な手段であると同時に、クラブ内での実践者どうしのつながりをクラブ外のつながりに向けて架橋していくための手段でもある。クラブ間のスポーツ実践者（顧客）をめぐる競争は、より多くの顧客を獲得するというクラブ側の主観的な動機を満たす手段であるだけでなく、そこで生み出されるサービスが生涯にわたって競争を楽しむためのつながりを形成するという点において、生涯スポーツの推進という社会的価値を実現するための手段としても機能する可能性をもっているのである。

6. まとめ

本研究の目的は、競争の形式およびスポーツ実践者（顧客）の獲得をめぐるスポーツクラブ間の競争という点から、生涯スポーツの推進に関する考察を行うことであった。

まず、マスターズ大会における参加者の増加からわかることは、「何歳になっても競い合いたい」という文化的欲望の高まりである。生涯スポーツにおいては、この欲望を満たす多様な競争形式を構築することが必要になる。マスターズ水泳大会においては、年齢によって生じる身体的差異を縮減するため、「区分」という

ルールを設定することにより、同一年齢層による競争を可能にしている。このルールにより、同一年齢層にある人々を結合させると同時に、区分内での泳力の高さを証明することのできる競争を生み出しているのである。また、車椅子バスケットボールにおいては、障害によって生じる身体的差異を「持ち点」に変換するルール、さらにはその持ち点の合計を規定するチーム編成に関するルールにより、多様な障害をもつ人々の競争を可能にしている。このルールにより、持ち点の低い障害者（障害の程度の重い人）から持ち点の高い障害者（障害の程度の軽い人）までを結合させると同時に、持ち点の差異を利用したチームプレーによる得点能力と防御能力の高さを証明することのできる競争を生み出しているのである。

上記の二つの競技から理解されることは、＜身体的な差異＞をどのように操作するか、という点である。多様な年齢の人々が競争するためには、加齢による身体的な差異の幅を圧縮するルールを設定することにより、同一の年齢クラスにおける特定の身体能力の卓越性が証明されるような競争を組織することが必要となる。これに対し、さまざまな障害をもつ人々が競争するためには、スポーツの用具を操作できる能力で障害者の身体を新たに差異化するルールを設定することにより、その差異を生かしたチーム能力の卓越性が証明されるような競争を組織することが必要になる。

つぎに、スポーツの競争をもとして生まれるつながりには「結束型」と「橋渡し型」に相当するような二つのタイプが存在する。総合型地域スポーツクラブおよび民間の商業スポーツクラブは、「クラブ内のメンバーとスポーツを通して競い合いたい」という欲望だけでなく、「クラブ外の試合に参加し、他のクラブのメンバーと競い合いたい」という欲望をもった人々の獲得をめぐる競争を展開する必要があるだろう。なぜならば、第三者であるスポーツ実践者（顧

客）のニーズに応じたサービスを展開することには、クラブ側の利益だけにとどまらないからである。生涯スポーツを推進するためには、国や地方自治体などの行政、地域のスポーツクラブ、施設や指導者などを構成要素とする関係のシステム⁷⁰⁾を構築することが求められるのであり、このシステムを生涯スポーツ圏と名づけるならば、競争に対する欲望を満たすためのサービスは、生涯スポーツ圏の形成に寄与するだけでなく、二つのつながり（結束型のつながりと橋渡し型のつながりに相当）の育成にも貢献すると考えられる。

以上のように、多様な身体を有する人々が生涯にわたってスポーツを行うためには、身体的差異（年齢や障害に起因する差異）をスポーツの文脈において操作することにより、争点が明確に限定されたザッハリッピな競争形式を創出することが重要である⁷¹⁾。さらに、生涯スポーツを推進するためには、競争に対する欲望をもったスポーツ実践者（顧客）の獲得をめぐるクラブ間の競争がこれまで以上に求められることになる。なぜならば、このクラブ間の競争は、クラブの利益につながる可能性を有しているだけでなく、そこで生まれるサービスは生涯スポーツの推進という社会的価値を実現するための一助になると考えられるからである。

（付記1）本研究は、日本体育学会第66回大会・体育哲学専門領域シンポジウムA「生涯スポーツ（論）と学校体育（1年目）—生涯教育・学習としての『文化としてのスポーツ』」において行った発表（「生涯スポーツのための競争形式および組織」）の内容に加筆・修正を加えたものである。

（付記2）本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（平成27－29年度 挑戦的萌芽研究「ESDを視野に入れた学校体育におけるプログラム開発」課題番号：15K12631 研究代表：三原幹生）」の助成を受けて行われた。

注および引用・参考文献

- 1) 日本環境教育学会編. (2013). 環境教育辞典. 教育出版. p.330.
- 2) 「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議. (2011). 我が国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画 (ESD 実施計画). p.5.
- 3) (社)日本体育学会監修. (2006). 最新スポーツ科学事典. 平凡社. p.448.
- 4) 金崎良三. (2000). 生涯スポーツの理論. 不昧堂出版. p.40.
- 5) 金崎. 同上書. p.40.
- 6) 金崎. 同上書. p.63.
- 7) 金崎. 同上書. p.75.
- 8) ここでは、「欲求」との違いをもとにして、「欲望」という用語を使用している. 欲求が本能的・生理的であるのに対し, 欲望は文化的である. 例えば, デスクワークに従事する人が仕事の合間に背伸びをしたり, 首を回したりするのは身体的な欲求であるのに対し, スポーツやダンス, あるいは日本舞踊などで身体を動かそうとするのは欲望であると考えられる. 本稿においては, 人間が作り上げてきた文化的構成体としてのスポーツを媒介することで生じる欲求 (例えば, テニスで相手に勝ちたいという身体的欲求) は文化的欲望であると考えている. このような区別は, 丸山圭三郎の考え方に依拠している. これに関しては, 下記の文献を参照されたい.
丸山圭三郎. (1987). 文化=記号のブラックホール. 大修館書店.
- 9) これに関しては, 以下のウェブページを参照されたい.
(<http://www.masters-swim.or.jp/>) 2016 年 12 月 14 日最終アクセス.
- 10) これに関しては, 以下のウェブページを参照されたい.
(<http://www.japan-sports.or.jp/masters/>) 2016 年 12 月 14 日最終アクセス.
- 11) ワイス, P. 片岡暁夫訳 (1985). スポーツとは何か. 不昧堂出版. p.18.
- 12) 菅野仁. (2003). ジンメル・つながりの哲学. 日本放送出版協会. pp.164-165.
- 13) ジンメル, G. 居安正訳 (1994). 社会学 (上巻). 白水社. p.262.
- 14) 菅野. (2003). 前掲書. p.165.
- 15) ジンメル. (1994). 前掲書. p.264.
- 16) ジンメル. 同上書. p.265.
- 17) ジンメル. 同上書. p.263.
- 18) ジンメル. 同上書. p.264.
- 19) ジンメル. 同上書. p.267.
- 20) ジンメル. 同上書. p.267.
- 21) 菅野. (2003). 前掲書. p.171.
- 22) 菅野. 同上書. p.71.
- 23) ジンメル. (1994). 前掲書. p.282.
- 24) 菅野. (2003). 前掲書. p.174.
- 25) ジンメル. (1994). 前掲書. p.300.
- 26) ジンメル. 同上書. p.301.
- 27) ジンメル. 同上書. p.299.
- 28) ジンメル. 同上書. p.299.
- 29) 菅野. (2003). 前掲書. p.180.
- 30) 菅野. 同上書. p.176.
- 31) ジンメル. (1994). 前掲書. p.275.
- 32) ジンメル. 同上書. p.279.
- 33) 菅野. (2003). 前掲書. p.173.
- 34) ジンメル. (1994). 前掲書. p.280.
- 35) 菅野. (2003). 前掲書. p.180.
- 36) 菅野. 同上書. p.181.
- 37) 菅野. 同上書. p.173.
- 38) 菅野. 同上書. p.174.
- 39) 渡正. (2012). 障害者スポーツの臨界点. 新評論.
- 40) 渡正. 同上書. p.176.
- 41) 渡正. 同上書. p.176.
- 42) 渡正. 同上書. p.174.
- 43) 渡正. 同上書. p.178.

- 44) 渡正. 同上書. p.180.
- 45) 渡正. 同上書. p.178.
- 46) 渡正. 同上書. p.176.
- 47) (一社) 日本車椅子バスケットボール連盟 競技・規則審判部編. (2014). 2014 車椅子バスケットボール競技規則. p.74.
- 48) 渡正. (2012). 前掲書. p.179.
- 49) 渡正. 同上書. pp.192-193.
- 50) 渡正. 同上書. p.221.
- 51) 渡正. 同上書. p.221.
- 52) 稲葉陽二. (2011). ソーシャル・キャピタル入門. 中央公論新社. p.14.
- 53) 稲葉. 同上書. p.1.
- 54) 稲葉. 同上書. p.41.
- 55) 稲葉. 同上書. p.56.
- 56) パトナム, ロバート・D. 柴内康文訳. (2006). 孤独なボウリング. 柏書房. p.14.
- 57) パトナム. 同上書. p.27.
- 58) 小林勉. (2013). 地域活性化のポリティクス. 中央大学出版部. p.219.
- 59) 小林. 同上書. p.219.
- 60) 稲葉. (2011). 前掲書. p.31.
- 61) 民間スポーツクラブがアスリート養成の実践空間に参入することによって, 学校運動部と民間スポーツクラブの間には文化的正当性をめぐるせめぎあい(文化的言説による象徴闘争)が生じている. このような視点は, 文脈は異なるが, 本稿にも大きな示唆を与えてくれる. 文部科学省は, 総合型スポーツクラブと民間商業クラブの関係を補完および関係・協力の関係で捉えているが, 総合型スポーツクラブの誕生と地域への進出により, 今後は総合型地域スポーツクラブと民間スポーツクラブの間で顧客の獲得をめぐる競争が生じてくると考えられる. ここで求められるのが, 顧客のニーズを知ることであり, 本稿においては, 「クラブのメンバーと競技会や大会に出場し, 他のクラブの人々と競い合いたい」というニーズもその一部であると考えている. なお, アスリート養成の実践空間の変動と文化的正当性をめぐる学校運動部と民間スポーツクラブとのせめぎあいに関しては, 以下の文献を参照されたい. 松尾哲矢. (2015). アスリートを育てるく場>の社会学. 青弓社.
- 62) 木村和彦. (2002). 体育・スポーツ事業の進め方. 八代勉・中村平(編著). 体育・スポーツ経営学講義. 大修館書店. p.100.
- 63) 最新スポーツ科学事典. (2006). 前掲書. p.389.
- 64) 中西純司. (2002). 民間スポーツ・フィットネスクラブの経営戦略. 八代勉・中村平(編著). 体育・スポーツ経営学講義. 大修館書店. p.170.
- 65) 2012年の民間フィットネスクラブの施設数は3,945であり, 会員数は4,025,410となっている. 一方, 2012年の総合型スポーツクラブの数は3,048であり, さらに348が創設準備中となっている. これに関しては, 下記文献を参照されたい. 笹川スポーツ財団. (2014). スポーツ白書2014. pp.176-178.
- 66) これに関しては, 以下のウェブページを参照されたい. (http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/058.htm) 2016年12月14日最終アクセス.
- 67) 「需要戦略(マーケティング)戦略」には, 「クラブ内外の環境分析」「市場・顧客ターゲットの確定化」「顧客適合理化」に加え, 価格設定とプロモーション活動がある. これに関しては, 以下の文献を参照されたい. 中西純司. (2004). 前掲書. pp.169-180.
- 68) フィリップ・コトラー, ゲイリー・アームストロング, 恩蔵直人. (2014). コトラー, アームストロング, 恩蔵のマーケティング原理. 丸善出版. p.5.

⁶⁹⁾ スポーツクラブで提供されるサービスのあり方が会員の獲得に大きな影響を与えると考えられる。永松らは、公共施設と民間施設ではサービスに対するユーザーの要望の構造が異なることを明らかにしている。この構造を構成する因子として、「ハードウェア整備因子」「プロモーション活動因子」「人的対応因子」「施設規模因子」が示されている。本稿の文脈に引き寄せて言うならば、総合型地域スポーツクラブと民間の商業スポーツクラブが顧客をめぐる競争する場合には、これらの因子に関する項目が競争の対象になるということである。これに対し、筆者は、スポーツを通して生み出される競争に対する欲望を満たすサービスもクラブ間の競争の対象になると考えている。このユーザーの要望構造に関しては、以下の文献を参照されたい。

永松昌樹・赤松喜久・島崎仁. (1995). 商業スポーツクラブ施設におけるサービス評価に関する基礎的研究 I. 大阪教育大学紀要. 第IV部門. 第44巻第1号. pp.115-123.

⁷⁰⁾ 金崎は、システム論の立場から生涯スポーツを捉えた場合の生涯スポーツ・システムのモデルとして、「人間」「スポーツの物的資源」「スポーツのプログラム」「スポーツの指導者」「スポーツの組織」の5つの要素が互いに関連を有しながら望ましい生涯

スポーツ現象という全体としての目標を達成する集合体を提示している。本稿は、金崎のシステムモデルに基づくならば、「人間」と「スポーツのプログラム」に焦点をあてた生涯スポーツ論ということになるであろう。ただし、本稿は、競争に対する欲望をもった人間、さらにはそのような人々をめぐるクラブ間の競争とプログラムサービスという点から生涯スポーツの推進について論じている。金崎のシステム論に関しては、以下の文献を参照されたい。

金崎良三. (2000). 前掲書. p.87.

⁷¹⁾ 多様な身体を有する人びとが競争するには、それを可能にする競争の形式が必要である。本稿では、健常者どうしの競争と障害者どうしのそれを区別して考察してきたが、現実的には、トップレベルの障害者が既存の競技会に参加し、健常者と試合を行っていることから、健常者と障害者の競争を可能にする形式の分析も必要となる。ただし、装具とパフォーマンス能力の関係性などの議論を含め、健常者と障害者の競争は萌芽的段階であると考えられる。これらの問題は、たんに競争形式の問題だけでなく、「スポーツとは何か」に関する根本的な問題であることから、別稿にて新たに考察したい。

受付 2016年9月19日

受理 2017年3月15日